

双子の星

ようこそ宮沢賢治の本の世界へ!!

☆本のアピール☆

天の川の西の岸にすぎなの胞子ほどの小さな二つの星がみえます。あれはチュンセ童子とポウセ童子という双子のお星さまの住んでい小さな水精のお宮です。二人の童子が触れた者の心にほのかな愛をもしてもしていくお話です。双子のお星さまの役目は一晩銀笛を吹くことです。この双子はどんな触れた者の心にはほのかな愛をもしていくのでしょうか？この本はわくわくしながら読める本です。ぜひ読んでみてください。

おもな登場人物

- ・チュンセ童子
 - ・ポウセ童子
- という双子の星

あらすじ

天の川の西の岸にすぎなの胞子ほどの小さな二つの星がみえます。そこには双子の星のチュンセ童子とポウセ童子が住んでいました。小さな二つの星は小さな水精のお宮です。双子の星の役目は一晩銀笛を吹くことでした。

ある朝、チュンセ童子とポウセ童子はくつをはき、歌を仲よく歌いながら空の泉に行きました。そこでチュンセ童子がくつをぬいで小流れの中に入りポウセ童子は岸から手ごろの石を集めはじめました。その時、空のすすきをざわざわと分けて、大鳥が居りて来しました。大鳥は二人を見ておじぎをしました。

次に赤い目のさそりが向こうからやってきました。さそりは十分ばかりごくりごくりと水を呑みましました。大鳥とさそりは、ケンカをしはじめました。大鳥もさそりもすごい傷があります。そこで双子は流れに連れてい、てきれいに傷

をあら、てあけました。そして二人はまた銀笛をとりあげました。東の空が黄金色になり、もう夜明もありません。

心に残った場面!

チュンセ童子とポウセ童子がケガをした物を流れてつれていて、手当てをしてあげるときの場面

作者はこの物語で何を伝えたかったのか

宮沢賢治は、この作品でたれかか傷をしたらすぐに助けてあげないといけない。人を助けることはとても大切だと伝えたかったと思います。

家の人からの感想

双子の星の話、ぜひ読んでみてい。あらすじを読んでみて、やさしい感じが伝わってきます。宮沢賢治のお話、心があたたまりますね。